View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

島根県立大学短期大学部出雲キャンパス
研究紀要　第６巻，47－55，2011

地域を基盤とした看護教育を支援する地域連携ステーションの活動報告

小村　智子・平野　文子・狩野　鈴子
高橋恵美子・金築　利博

概　　要

平成19年度に採択された文部科学省「現代的教育ニーズ取組プログラム」の後継事業として，地域を基盤とする看護教育の柱である学生・市民・大学・保健医療福祉行政の４者間のつながりを促進･サポートする拠点として「地域連携ステーション」を本学において継続させてきた。

今回は，「教育力向上」「地域活性化」を目指した活動状況をまとめた。地域連携ステーションが地域に開かれた窓口であり続けるためには，連携に必要な“支援”と“調整”のための技術を磨き続けることが大切であると考えられた。

キーワード：地域連携ステーション，自主グループ，教育力向上，地域活性化

Ⅰ．はじめに

平成19年度に採択された文部科学省「現代的教育ニーズ取組プログラム(以下，現代ＧＰとする)」の後継事業として,「地域連携ステーション」を島根県立大学短期大学部出雲キャンパス（以下，本学とする）においた。そして，地域を基盤とする看護教育の柱である学生・市民・大学・保健医療福祉行政の４者間のつながりを促進・サポートする拠点とした。

ここでは，「教育力向上」と「地域活性化」を目標に，(1) 学生への自主グループでの学習支援，(2) 自主グループへの活動支援，(3) 地域や行政等との連携，(4) ITを含むネットワーク化の促進を中心とした活動を行ってきた。

このように，地域を基盤とした看護教育を支援する地域連携ステーションのような組織を教育機関が有するところは少なく，今回はその具体的な活動を紹介する。

Ⅱ．用語の定義

＜地域を基盤とする看護教育＞

生活意識や問題意識の高い自主グループ等地域との連携を通じて，看護の専門知識だけでなく，多様化する社会のニーズを明確に認識し，それらに対応できる能力(生活者としての理解，コミュニケーション能力や問題解決能力など)を育成することを狙いとした看護基礎教育における教育方法。

＜自主グループ＞

地域の様々な健康づくりに取り組む仲間で組織され，その活動は，何らかの課題を抱える当事者とその周辺の人たちによる自助・独立と相互扶助および支援に基づく活動を行っているグループ。

Ⅲ．地域連携ステーションの概要

１．設置の目的

地域連携ステーションは,地域を基盤とする看護教育の柱であり,学生，市民，大学，行政の４者間の人と人との“つながり”を促進・サポートする拠点である。具体的には「教育力向上」と「地域活性化」を目標に，学生の自主グループでの学習支援，自主グループの活動支援，自主グループや行政等との連携，ITを含むネットワーク化を促進することであり，大学の地域

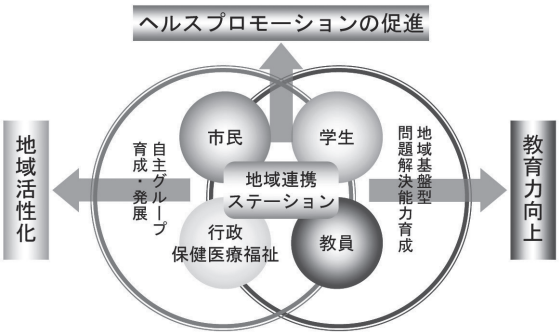

図１　地域連携ステーションの期待される効果

表１　地域連携ステーションの目標と役割

目標	「教育力向上」 「地域活性化」
役割	１）学生への自主グループでの学習支援 ２）自主グループへの活動支援 ３）自主グループや行政等との連携 ４）ITを含むネットワーク化の促進

に開かれた窓口としての役割を果たすことを目的としている（図１）（表１）。

２．設置場所

学生や自主グループをはじめ地域の方々が気軽に訪室しやすいように，キャンパスの入口に近い実習棟の１階の１室を専用の部屋とし，通信機器や事務機器を備えている。

３．配置職員

学生や健康課題を持つ自主グループへの対応を円滑にするため,看護職免許を有する専属の嘱託職員を１名配置している。

４．運営

専属の職員を中心として，看護専任教員３名と事務職員１名の計５名で定期的に会議を開き，本学の教育理念に添った活動報告と協議を行いながら運営している。(写真４)

Ⅳ．地域連携ステーションの活動の実際

地域連携ステーションとして活動している内容について，支援の対象としている学生を中心として,教員,自主グループ毎に述べる（表２)。

１．学生への自主グループでの学習支援

学習の準備段階，学習当日の段階，学習後の段階と大きく３つの過程で関わっていった。

その中でも重要と考える準備段階では，教員が提示している学習目的・学習目標を十分理解し，学生の学習目標やレディネスの把握に努めた。また，関係する自主グループの特徴や抱える健康課題，グループとしての発展過程についても情報を得て臨んだ。

そして，学生が自主グループを訪問する時には担当教員,自主グループ,学生と日程等の連絡調整を行い,必要に応じて学生に同行した。医学概論でのがんサロン訪問への同行，看護特論や看護研究の基礎：演習での関連する自主グループと連絡調整等を行った。

その中の具体例として，看護研究の基礎：演習（老年）では，介護予防の健康を考える自主グループに学生が参加した。訪問の日程など担当教員と連携を取りながら自主グループの代表者と日程調整を行った。参加するにあたり準備する物品等の確認をし，学生に知らせた。訪問前は，学生に訪問の目的を確認し，自主グループに関する情報についてもホームページを紹介し，説明を行ったりした。

当日，学生は初めての訪問であり，同行したが，そのことで緊張感が緩和され，スムースな学習へと繋がった。この自主グループは，今までに何度も学生の訪問を受けているため，学生の受け入れはよく，学習対応もきちんとしていた。そのことも影響し，学生はグループ活動の健康運動に一緒に参加して汗を流し，円滑な関係を築くことができていた。そして，自然な状態で学習目標を達成するためのインタビューもスムースに行うことができた。自主グループの参加者も学生たちに声をかけてくださるので学生たちの表情は活き活きとしていた。

一方，初めて学生を受け入れる自主グループについては，学生と自主グループ間の仲介をしたりと，その自主グループの状況により対応を変えていく必要がある。

訪問後は，学生が自主グループの活動に参加しての学びや意見・感想を学生の了解を得て

表2　地域連携ステーションの具体的な活動

1)学生への自主グループでの学習支援

医学概論	1年次生による,がん情報サロン訪問に計8回同行し 1年次生全員訪問した。(写真1)
成人看護学	3年次生による,がん検診に関するがんサロンや行政へのインタビューや その結果を発表するときの支援をした。
助産学専攻 母子保健論	NICU退院児等親子交流会　当事者の方および行政の方の講義,活動 (イチゴ狩り、座談会、学習会)への参加支援をした。(助産専攻科学生8名)(写真2)
在宅看護特論	在宅の難病患者宅への連絡と学生の訪問時の同行(看護学科3年次生2名ずつ)
看護研究の基礎 :演習(老年)	健康サークルへの連絡調整と訪問時の同行(看護学科3年次生4名)(写真3)
	認知症患者家族の会への連絡調整と訪問時の同行(看護学科3年次生4名)
成人看護特論	がんサロン訪問に同行　　市民講座に参加　　成果発表会に参加
老年看護特論	診療所　事前取材に同行 (看護学科3年次生7名)　地域包括ケア学習実施の支援　3泊4日　学生8名
正課外	ふるさとあったかスクラム事業「健康ウォーク」ボランティア参加の学生に同行 (地域専攻科学生10名　看護学科3年次学生2名)
	在宅ボランティアサークルへの情報提供
	禁煙を考える会への参加について打ち合わせ
	いずもサマースクール2011への学生ボランティアの参加支援　実施準備・学生の参加支援 (看護学科学生18名参加)
	難病患者家族交流会や難病ホリデーサロン,難病コミュニケーションボランティア研修を学生に周知し,参加を希望する学生に同行した。
	地域専攻科学生の地域コミセンでのリサイクル協力についてHPで紹介
学生自主 グループ支援	学生がん啓発グループの活動を支援した。まつりでの啓発活動をHPにUP(保育園の保護者会やコミュニティセンターの子育てサークル等での啓発活動、病院がんサロンでの研修会の参加やがん患者さんとの交流会への支援)

2)教員への支援

地域連携ステーション会議の開催(1回/月)
出前講座「訪問看護紹介」について　ケーブルテレビ収録の協力
病院主催の映画の周知と参加者集約・映画会参加
がん患者支援等について県の担当者と協議
虐待予防研修に関する企画・準備・実施支援
いずもサマースクール 2011について保護者会議・実行委員会運営の協力
在宅看護論での招致講義の聴講及び写真撮影協力

3) 自主グループへの支援

HP支援

患者家族のつどい案内

がんサロンの紹介

定例会・フォーラムのご案内　当日の支援

がん啓発講演会のシンポジストとして学生が参加した

難病サロンのサロン便りの紹介などホームページで発信した。

神経難病サロンだよりの掲載

難病相談支援センターよりコンサートの案内

難病患者つどいの報告　　招致講義の報告

通信機器等に関する支援

ネットでつながる6グループを業者の方と訪問し通信機器変更を行った

通信機器の不具合・トラブル等の連絡を受け,対応した。

メールアドレスの変更について対応

毎月のアクセス数を確認し,その情報を必要とするグループに通知した。

活動支援

病院がんサロン開設5周年コンサートに参加

がんサロン代表者の市民フォーラム参加の周知と聴講

フォーラム開催・実施への支援をした。(検討会議に参加,チラシ作製,当日の準備片付け等)

がんサロンの代表者のプレゼンテーション資料の作成等の支援をした。

難病患者家族交流会や,がんサロンの連絡会に参加し,活動予定を聞き,情報提供を依頼した。

難病患者支部総会と患者家族交流会のボランティア依頼の対応

パーキンソン病フォーラムに参加　　代表者の本学での招致講義について支援

難病患者県支部総会、患者家族交流会ボランティア支援　(地域看護学専攻学生2名　教職員3名)

がんサロン代表者及び　難病患者の本学での招致講義の準備支援

4) 自主グループや行政等との連携

「がん対策キャンペーン」では県・市町村・保健所・新聞社等と連携した。

「フォーラム」では社会福祉協議会・市役所等と連携した。

「成人看護特論」では,県の医療政策課、町役場、市役所, 病院等と連携した。

難病関係の支援で保健所・難病研究支援センターと連携した。

県外の大学生と県医療政策課,がんサロンの患者さんも参加し,各々の活動について
情報,意見交換をする交流会に参加した。

ホームページに掲載し，大学からの情報発信に努めた。

また，学習の機会を提供するために，自主グループの研修会や活動状況について，随時,ホームページやメール，ポスターの掲示で学生に知らせるように努めた。ホームページやポスターを見て興味や関心を持ち，地域連携ステーションを訪れる学生には，個別的に対応した。夏期休暇など長期休暇の時間を利用して，地元の自主グループを訪問したり，研修会に参加したと

5)ITを含むネットワーク化の促進を中心とした活動

地域連携ステーションの紹介チラシを作成し,ITネットワークの現状を紹介した。

毎月のアクセス数を確認し,その情報を必要とするグループに通知した。

産業フェアに出展し,地域連携ステーションを地域に紹介する機会とした。

ホームページに載っていない新たなグループ(難病等)からの情報を地域連携ステーションから紹介,発信した。

地域や学内の教員から受けた研修会やイベント等の情報を、地域連携ステーションから学生や教職員へホームページや学内メール等で発信,周知した。

写真１　看護学生のがんサロン訪問学習

写真２　助産学専攻　　NICU退院児等親子交流会の活動に参加

写真３　介護予防グループでの活動

写真４　地域連携ステーション会議

いう学生もおり，その報告のために，また地域連携ステーションを訪れる学生もいた。

正課外活動では，がんの検診受診率が低いという島根の健康課題に着目し，自主的にがんの啓発活動を行っている学生のグループ支援を行った。学生の活動目標や活動内容を把握し，関連するがんサロンの方たちとの連携を支援した。がんサロンのメンバーや検診啓発サポーターと一緒に知識を深める研修会や，がん啓発活動に参加する機会の調整をして参加した。また，他県の大学生との交流や本学でのがん啓発活動にも関わることで，学生のグループ活動が活性化してきている。

２．教員への支援

「学習のてびき」に掲載されている教員が示す学習目的・学習目標に応じ，関連する地域活動・自主グループの情報を提供した。また,自主グループ・学生・教員間の連絡調整を行った。

そして，学生が自主グループへの活動に参加した時には，学生の学習状況に関する報告をした。そのことで，教育の成果や課題を考える基礎データとして寄与することになると思われる。

また，教材・報告資料等の作成についても支援した。今年度は，学生と一緒に地域のケーブルテレビで定期的に放映されるビデオ番組に出演するなど制作に協力した。教員の地域貢献活動の支援ともなったと考える。

３．自主グループへの活動支援

まず，自主グループの設置や活動目標，活動内容についての情報収集に努めた。必要時，訪問しながら自主グループ活動に参加し，グループの理解と把握をした。そのような関係づくりをしながら,自主グループの活動支援において，地域連携ステーションに求められているものは何であるのか，協議する場を設ける等して明らかにしていった。留意したのは，あくまでも主体は自主グループであり,支援し過ぎないこと，自主グループが何を望んでいるのかを確認しながら行うことであった。

具体的には，自主グループのホームページの更新,自主グループ関連の講演会,学習会等の広報活動を支援した。また，毎年フォーラムを行う自主グループに対しては，行政と地域の福祉協議会と協力してそれぞれの役割を分担して支援した。不慣れで苦手とされていたチラシやパンフレットのデザインを地域連携ステーションが担当した。

また，自主グループで様々な活動を行う上での悩みや迷いを感じた時，あるいは体調不良時には，グループ代表者等の思いにしっかりと耳を傾けながら，ひたすら聴くことも大切な支援であった。そのような問題を抱えられた時には地域連携ステーションまで訪問して下さるので，ゆっくりと話を聞くことで問題が解決することもあった。関わった自主グループからは，「私達ができないことをいつでも支援してくれる地携ステーションがあるから，本当に助かっている」という声も聞かれる。

自死遺族の会は，分かち合いの段階を経て，勉強会などを実施しようとグループの活動が活発になり，次の段階に発展していることが伺える。グループの発展段階は順序だててたどっていくわけではないが，自分が現在関わっているグループがどの段階にいるかを推察することは，現在もしくはその後の関わりや支援を考えていく上で非常に重要である，と言われている(都筑，2003)。よりよい支援としていくためには，個々の自主グループの発達段階に合わせた対応が要求される。

４．自主グループや行政等との連携

学生の教育目的を達成するために，自主グループや関係する行政機関等との連携をした。

「がん対策キャンペーン」では県，市町村，保健所，新聞社，がんサロンのメンバーが一堂に会し，それぞれが自己の役割を果たす。それぞれの役割を学生に理解してもらうために学生に紹介したり説明したりした。

「成人看護特論」では学生は、県，町役場，市役所，病院等に訪問した。学習テーマに必要な情報を集めるため，必要時，学生に同行した。学生の学習報告・発表会では，自主グループや上記の関係者を招き，一緒に学生の学びを聴講した。学習成果の発表後には，多くの関係者から，学びの賞賛と今後の医療従事者となる学生

表３　地域連携ステーションの訪問者（例：４月）

日	曜日	訪問者	時間	目的
4	月	印刷業者１名	10:00～20 分間	自主グループのフォーラムの紹介チラシの校正について
5	火	地域専攻科学生６名	14:00～15 分間	ステーションの見学
6	水	在宅ボランティア学生２名　担当教員	12:00～30 分間	在宅ボランティアの説明 サークル紹介の打ち合わせ
7	木	医療政策課　がん対策推進室　室長、主任　系３名	10:00～10 分間	挨拶
13	水	副学長 成人看護学特論 　担当教員と学生７名あいさつ	10:00～20 分間 10:20～10 分間	招致講義について講師の支援について 地域連携ステーションの役割説明とグループの写真撮影
14	木	看護学科教員１名	15:00	在宅訪問の資料を持参
20	水	市内中学校の教員	17:00～19:30	いずもサマースクール 2011「実行委員会」の打ち合わせ
21	木	在宅看護演習　学生１名	11:30～15 分間	挨拶と写真撮影
22	金	自主グループより１名 地域専攻科　10 名	16:00～30 分間 10:30	HP について、震災についてなど状況報告 地域のコミュニティセンター活動に協力していることについて説明を受ける
23	月	学生自主グループ３名	17:00～	在宅訪問の写真撮影 自主グループの活動について
25	水	老年看護学演習　学生4名と教員	11:00～15分間	ST の説明、地域の健康サークルとの調整
				計 43 名の訪問

への期待が込められたひとつひとつの言葉が，学生の心に響いたことが伝わってきた。自主グループや行政等の関係者との直接の触れ合いが知識を知恵に変えた瞬間であった。このように様々な関係機関との連携について学ぶ機会を，意識的につくり出したり支援することが重要であり，そのことが学生の学びに影響を与える。

５．ITを含むネットワーク化の促進を中心とした活動

ITを含むネットワーク化について，2010年度のホームページへのアクセス数は年間トータル約65,000件であった。月の平均アクセス数は，5,000件前後である。月のアクセス数を確認し，必要とするグループには通知している。ホームページに記事を掲載して情報発信している自主グループからは，閲覧した人々や関係者からの意見や反応がもっと知りたいという要望もあり，今後はその方法を検討することが必要である。

2011年度は，地域連携ステーションの紹介パンフレットを作成し,年度初めの4月には，ITネットワークの現状を学生に紹介した。出雲産業フェアにも出展し，地域連携ステーションを地域に紹介する機会とした。

また，ホームページに載っていない新たなグループ（難病等）から，サロンだよりなどの情報を地域連携ステーションから紹介，発信を行った。その結果，自主グループ間での新たな出会いや交流の場となり，ネットワーク化の一助ともなった。

６．地域連携ステーションへの訪問者について

地域連携ステーションの訪問者は，2011年４月の訪問者は計46名であった（表３）。４月から８月末までには144名の訪問があった。月平均にすると28名である。学生，教員，地域の自主グループの方はもちろん，行政等からの訪問もあり，情報交換の場となっていることがわかる。

Ⅴ．地域連携ステーションに求められるもの

本学では,大学憲章に「地域のニーズに応え，地域と協同し，地域に信頼される大学」の実現

を掲げ，教育理念として「開かれた大学」として地域の発展に貢献することを謳っている（平野，2011）。まさに，地域連携ステーションは，地域と大学を結ぶ，地域に開かれた窓口として存在している。

地域連携ステーションは「地域の活性化」と「教育力の向上」を目標とし，日々の活動では，学内や地域の多くの人と関わることのできる位置にあり，学生たちと関わる地域の人々の双方の表情が活き活きとする場面に多く出会った。地域連携ステーションは“連携”を業務とする。以前に緩和ケアの研修会で，地域で関連する施設間の連携活動を行っている講師から，「いい“連携”をするためには“支援”と“調整”を区別してとらえることが大切である」と聞いた。“支援”は相手が自己決定をするのを待つことであり，相手が何を望んでいるのか確認することである。そして，“調整”は，それを叶えるために必要な場所に，必要な人に“つなぐ”ことである。このことから，相手が心を開いてくれるような関係作りが重要であると学んだ。そのためには，相手の状況を丸ごと受け入れるような対応が必要である。そして，どこに“つなぐ”かの知識や最新の情報が必要不可欠である。地域連携ステーションが地域に開かれた窓口であり続けるために，連携に必要な“支援”と“調整”の技術を磨き続けていくことが大切である。

Ⅵ．おわりに

今回は，地域連携ステーションの具体的な活動を紹介した。本学に地域連携ステーションが存在することによる成果や課題について，今後明らかにしていく必要がある。

文　　献

都筑千景（2003）：グループ支援をしていくための理論・技術　社会福祉学領域の研究成果から，看護研究，36（7），551-552.

平野文子，伊藤智子，高橋恵美子，別所史恵，加藤真紀，山下一也，阿川啓子（2010）：地域を基盤とする看護基礎教育　自主グループ活動への参加を中心に，看護教育，51（5），373.

A Practice Report of Community Cooperation Station Supporting Community Based Nursing Education

Tomoko OMURA, Fumiko HIRANO, Reiko KANO,
Emiko TAKAHASHI and Toshihiro KANETUKI

Key Words and Phrases：Community Cooperation Station, Self-help Groups,
Development of Student Ability to Intervention,
Action of the Community